観能のタベ

（石川県立能楽堂）

平成二十九年七月二十二日（土曜日）午後六時三十分開演

演目解説（金沢美術工芸大学非常勤講師　村戸　弥生）

狂言　樋の酒（ひのさけ）

主人の留守を預かる蔵の番を、二人の冠者はどう心得ているのでしょう。太郎は米蔵へ、次郎は酒蔵へ、入るなり蔵の中身を自分の物にします。これほどたくさんあるものを、少々盗んでも見つかるまいとの料簡（りょうけん）です。勤務中でも主人は留守。むりむりと渋紙をのけて、次郎が酒を飲み始めました。隣の太郎への樋（とい）を使って酒を流してやります。こういう知恵は働きますが、汲めども尽きぬ猩々気分のところへ主人が戻り、追い込まれます。

能　須磨源氏（すまげんじ）

日向の国宮崎の社官藤原興範（おきのり）の一行（ワキ・ワキツレ）が伊勢参宮の旅の途中、津の国は須磨の浦に着き、花に眺め入る老いた山賤（やまがつ）（前シテ）に出会います。その花は光源氏ゆかりの若木の桜でした。山賤は源氏物語の巻名を織り込んで光源氏の閲歴を語り、さらに光源氏の旧跡を問う興範に、月の夜の奇特を待てと言い置いて雲隠れしました（中入）。やがて磯枕して心を澄ます興範の耳に妙なる音楽が聞こえてきます。これも源氏物語紅葉賀に描かれた、光源氏の舞い姿で名高い青海波（せいがいは）の楽です。今は兜率天（とそつてん）に住むいにしえの光源氏が、月に詠じ波の楽に惹かれて天下ったのです。青暗い夜の海に雲間から一条の月光がさして、青鈍色の狩衣をまとった童男（後シテ）が現れ、須磨の嵐に袂をひるがえして夜すがら舞い興じます。須磨暮らしの失意や物語第二部の苦悩にはあえて触れずに、栄華を極めた人の生涯をたどり、シテの人間的奥行より兜率天の菩薩（ぼさつ）の相貌を鮮明にしました。（金沢大学人間社会研究域教授　西村　聡）

装束附

前シテ（老翁）　尉鬘をつけ、笑尉又は朝倉尉或いは三光尉の面をかける。

後シテ（光源氏）初冠をいただき、覆懸をつけ、色鉢巻をしめ、中将の面をかける。

終了予定　午後八時十五分頃